

# 友人は本当に似ているのか

---

友人づくりが苦手な人の厚生を改善するために

## 要旨

- I. 現状分析・問題意識
- II. 先行研究および本稿の位置づけ
- III. 分析
- IV. 政策提言
- V. 先行研究・参考文献

市野ゼミ

11431031 一宮 正太郎

11431045 岩川 学

11431107 川村 亜耶嘉

11431195 田中 美紀

# 要旨

友人を大学生の初年次につくれるかどうかは、その後の大学生活の質に大きな影響を及ぼすことが先行研究から明らかとなっており、友人ができにくい人は、そうでない人と比べ、大学生活の質が劣ってしまう可能性が高まる。しかし、人は他の財・サービスとは違い、お金で買うことができない。したがって対人関係・友人関係は今ある資源の組み合わせを変えることでしか生み出すことができないのである。対人関係や友人関係に悩みを抱える大学生は、その人自身が問題をもっているというよりも、ただ単に自分に合った人に出会えていないということだと考えられる。

この研究の目的は、上記の問題の本質を見極め、その問題の解決策を導き出すことである。より具体的には、次の3つの問いに答える。

1つ目は、「そもそも友人は似ているのかどうか」という問い。そして2つ目は、「友人づくりが苦手な人は、友人と似ているのか、似ていないのか、またどういう点で似ているのか、似ていないのか」という問いである。上記2つの問いの答えをふまえ、3つ目の問い「友人づくりが苦手な人にとって、どのようなクラス編成を行えば友人を作りやすくなるのか」という問いに答える。そのため私たちはアンケートを用いてデータを収集し、統計的な分析を行った。アンケートは属性についての20個の設問項目と心理尺度を測る35個の設問項目で構成しており、甲南大学生を中心とした、お互いに友人だと思っている144人72ペアを対象としている。

1つ目の問いの答えは、アンケートの心理尺度を測る35個の設問における回答のズレの大きさから類似度を測定し、統計的手法を用いることで得られた。私たちのアンケートに回答した、全ペアの内2/3が5%水準で有意に似ている。

次に、2つ目の問いの回答は全ペアのうち少なくともどちらか一方に、友人づくりが比較的苦手な人がいるペアだけを抽出し、そのペアに対して各アンケート項目について相関係数を算出することによって得た。友人づくりが苦手な人の中で特に内向的な人は、人に対する「気遣い」の大きさが似ていて内向的な人と友人になりがちである。また友人づくりが苦手な人の中で、特に社交性の低い人は「衣服の流行への関心」の高さが同程度で社交的な人と友人になりがちである。友人づくりが苦手な人で自身の友人の数が少ないと感じている人は「自尊心」の高さや「親切心の大きさ」が同じくらいの人と友人になる傾向があるといえる。これらの結果をふまえ3つ目の問いである「友人づくりが苦手な人にとってどのようなクラス編成を行えば友人を作りやすくなるのか」に対して、私たちは「アンケートの結果を用いたクラスづくり」を提案する。具体的には、大学のゼミのクラス分けを行う際に、このアンケートにより明らかになった友人づくりが苦手な人のいるクラスに、その人と相性の良い人を配分する。そうすれば、友人づくりが苦手な人の厚生が改善すると考えた。

# I 現状分析・問題意識

人は生きていくうえで、人を必要としている。世界にはさまざまな人がいて人は、日々多くの人と出会う。対人関係の変化は一般的に日常生活に伴うものであり、そのたびに多かれ少なかれ、緊張や不安を抱えてしまうことはだれしもが経験することである。他者との関わりによって不愉快な経験をすることもあれば、対人関係の軋轢がストレスの原因になることもある。反対に、他の人ということで寂しさや孤独感を免れたり、不安や不満を聞いてもらうことでストレスが解消されたりすることもある。他の人に自分の意見に賛成してもらったり、努力を認めてもらえることで自信を高めることもあるだろう。

人という資源は限りがあり、費用をかけて友人を生産することはできない。同じように、友人関係というサービスは、今あるものの組みあわせを変えることでしかつくり出すことが出来ない。しかし、組み合わせを変えることでほかの人の状態は同じままで、それまで友人ではなかったある 2 人を友人同士にすることができるならば、それは経済厚生 of 改善につながる。誰もが損をすることなく、誰かの友人関係を改善することができるのである。

対人関係、あるいは友人関係というものは、お金で買うことはできない。しかし、人にとって必要であり、人をうまく配分することにより、人々を今よりも、より幸せに導くことができる。だが、人々はこの大切さについて気づいていないと考えられる。それは、学校のクラス分けをみるとよく分かる。クラス分けの際に、男女比を整えることや、学力に偏りが生じないようにするなど、入学時に客観的に識別できる属性に関しては考慮されている。しかし、どのような属性・心理的傾向の人がどういった人を必要としているか、あるいはどういった人と友人になりがちかという内面的なことが考慮されていないのが現状である。このことを考慮することで、より望ましい友人関係を人々が築けるようになる。具体的にどのような考慮が必要なのかを検討することが、この論文の大きな目的である。以上のことを考えていくうえで、対人関係は人々にどのような影響をおよぼしているかを見ていく。

自己の周りの環境変化の代表的なものとして、小学校から中学校へ、中学校から高校へ、そして高校から大学へと進学する場面があげられる。学校生活の場面の変化や対人関係の変化があるため、新入生は入学とともに、期待と不安を持ちあわせているだろう。特に高校から大学への入学は、他の進学よりも大きな変化を伴う。なぜなら、中学や高校への入学は学校生活の変化が大半を占め、家庭や近隣の状況は変化することが少ない。加えて、中学入学時は同じ小学校から進学する同級生が多いため、友人がいないという不安もあまりないと考えられる。高校入学も中学入学ほどではないにしろ、同じ事情であるといえる。しかし、大学入学は違う。多くの大学新入生は同じ高校出身の友人が少ない、または友人がいない状態からスタートするため、新しい仲間関係や、友人関係を作らなければならない。また、家族から離れて一人暮らしを始めるケースも多いため、他の進学と比べ、大きな生活の変化を伴うものになる。ソーシャルサポートの研究によれば、大学生の主要なサポート源は友人と母親であることが指摘されている<sup>1</sup>。例えば、入学 1 か月後の時点で学内に親密な友人関係を形成できている学生の方はそうでない学生よりも、自己の学生生活により肯定的なイメ

<sup>1</sup> 嶋 (1991) 「大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究」『教育心理学研究』第 39 巻, 4, pp.76-83.

ージを持っていることが明らかにされている<sup>1</sup>。さらに、入学直後の時点で、一緒に講義を聞いたり昼食を食べたりする仲間・友人、あるいは話し相手になる仲間・友人をより多く持っている人は、そうでない人と比べて、不安な気持ちを持つことが少ないということが研究からわかっている<sup>2</sup>。また近年、大学生における抑うつの高さが問題となっている。抑うつとはうつ病とは別物であり、「わけもなくかなしい」「むなしい」「生きる希望がない」などといった「気分の落ち込み」のことをいう。

大学生の精神的健康に関する調査<sup>3</sup>では、抑うつ、不安等のストレス反応によるストレス状態をネガティブな精神的健康とし、主観的に健康な状態や生活の質をポジティブな精神的健康とした上で、この 2 つの側面から大学生の精神的健康の調査をおこなっている。この調査から仲間との信頼関係により不安が軽減され、精神的健康に良い影響を与えることが示唆された。また、友人関係などの相談相手の存在の有無が精神的健康に影響を及ぼしており、相談相手がいない人のほうが精神的健康に悪い影響を及ぼしていることが明らかにされている。

以上のことより、友人を大学生の初年次につくれるかどうかは、その後の大学生活の質に大きな影響を及ぼすことが分かる。したがって、友人づくりが苦手な人は、そうでない人と比べて、大学生活の始まりにおいて困難な状況に立たされているといえるだろう。

私たちの研究の目的は 3 つある。1 つ目は、そもそも友人は似ているのかどうかという問いに答えることである。2 つ目は、友人づくりが苦手な人は、友人と似ているのか、似ていないのかを分析した上で、どういう点で似ているのか、似ていないのかを明らかにすることである。そして上記の問いへの答えをふまえて、友人づくりが苦手な人にとって、どのようなクラス編成をおこなえば友人を得やすくなるのかを知ることが私たちの 3 つ目の目的である。

現在、甲南大学経済学部では 1 年生の時に基礎ゼミという授業がある。基礎ゼミというのは、20 人程度の少人数クラスで自己紹介や発表といったことをおこなうクラスである。新入生に新しい友人をつくってもらい、大学に慣れてもらうという趣旨もある。基礎ゼミのクラス編成はいったいどのように行われているのかというと、何の意図もなくランダムにクラス編成がおこなわれているというわけではない。大学入学時の入り方（推薦入試・一般入試等）、男女比そして入学時の志望理由に書いてある興味のある分野を考慮し、おこなわれている。このことから新入生の入学時の、客観的な属性のみによってクラス分けがなされているということが分かる。このようなクラスは、甲南大学経済学部に限った話ではなく、少なくとも甲南大学の経営学部や法学部、そして名称は違うが関西学院大学にも同じような形式のクラスがある。客観的屬性を考慮している大学や学部はあるが、クラスで友人が作りやすいかを考慮していない。大学入学時の友人関係は、その人の大学生活の質に大きく関係しているという事実がありながら、クラスづくりにあたって友人が作りやすいかを配慮されていないことが現状である。

クラスづくりの際に友人づくりが苦手な人のために、ひとりでもその人と友人になりやすい傾向がある人を同じクラスに入れてあげるだけでいい。友人づくりが苦手な人が、その

<sup>1</sup> 梅本（1992）「大学新入生の適応について—自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連」『盛岡大学紀要』11, pp.27-38

<sup>2</sup> 梅本（1996）「大学入学直後の友人関係と不安に関する研究」『盛岡大学紀要』15, pp.183-189

<sup>3</sup> 三浦、青木（2009）「大学生の精神的健康に関連する要因の文献的研究」『山口県立大学学術情報』2, pp.175-180

人と友人になるかならないかはわからない。しかし、このことを考慮せずクラスづくりをするよりも、考慮した方がよいのは当然である。

そこで私たちの研究では、お互いに友人だと思っている人同士でアンケートを実施し、まず目的の1つ目である、友人同士がどれくらい似ているかを明らかにする。そのうえで、2つ目の目的は友人がつくりにくい人、たとえば内向的な人や自分自身友人が多いと思っていない人は、どのような点で似ている人を友人にしがちなのかを検証する。そして、大学1年生の時のクラス編成の際に、友人づくりが苦手な人が友人をつくりやすい環境を整え、上記の問題を改善する方法を提案する。

## II 先行研究及び本稿の位置づけ

「友人づくりが苦手な人はいったいどのような人と友人になるのか」という問いがこの研究の主要な問いの1つである。より具体的に言えば、この問いは友人づくりが苦手な人は、友人と似ているのか似ていないのか、また、どの点で似ている、または似ていないのかに答えることである。その問いへの答えをもとにして、私たちは、次のような政策提言を行う。その提言とは、友人づくりが苦手な人が新しい環境において、友人をつくりやすいような環境を提供することである。したがって、「友人は本当に似ているのか」、「友人が苦手な人はどのような友人を持つのか」という先行研究が私たちの研究に密接に関連している。

まず「友人は本当に似ているのか」の先行研究には門田・平本(2004)がある。門田・平本(2004)は「(1)自分が自分をどう思っているのか(2)友人と似ている度合いの理想(3)友人と似ている度合いの現実」をアンケートで調べた研究である。大学生を対象とし、友人が自分と似ているのかを見るアンケートを実施した点で、この研究は私たちの研究と共通している。しかし、門田・平本(2004)は1人ひとりにアンケートで友人の理想と現実をたずねているが、私たちの研究では仲の良い友人同士を1ペアとし、アンケートを取っており、現実だけをたずねているという点で異なっている。門田・平本(2004)のアンケートでは、回答者が自分と自分の友人がどれくらい似ているかと思っているかをたずねているため、相互に友人である根拠はなく、回答者が似ているかどうかを判断しているため主観的である。それに対し、私たちは友人の2人ペアでアンケートをとっており、私たちがその人2ペアは似ているのかを判断しているため、友人同士の類似性においてはより客観的に計測できている。門田・平本(2004)は、理想次元よりも現実次元において非類似性が現れやすいことを明らかにしている。つまり、「友人は本当に似ているのか」という問いに対して、否定的であると言えるだろう。しかし、自分に自信を持つ人や女性には、友人と似ているという傾向があると認めている。

次に、「友人づくりが苦手な人はどのような友人を持つのか」の先行研究には石田(2003)がある。石田(2003)は大学新入生の友人関係を、入学1ヶ月後から縦断的に測定し、シャイネスが友人関係の形成過程に及ぼす影響について検討している。質問用紙の構成は、「大学に入ってから知り合った中で、最も親しい同性・同年輩の友人」をひとり想起させ、その人物との関係性について、(1)行動側面、(2)認知的側面の評定を求めたものである。その分析結果は、1)男性の場合に限り、シャイな人の友人ネットワークは、シャイでない人に比べて小さく、それはシャイな人が新たな友人関係を形成しにくいためであることを示している。2)シャイな人の友人関係は、相互作用、親密性の認知の両次元で、親密な関係にまで進展しなかったことが明らかにされている。3)一般的に言って、相互作用と親密性の認知の相関は、時間経過に伴って増大するが、シャイな人ほど関係初期の段階から高い相関を示す傾向にあることが示された。3)については、私たちの研究でも、シャイな人ほど友人と似ているという傾向にあることが分かっている。ここでのアンケートも回答者が友人1人を想起させている点で、私たちの研究と異なっている。

大学入学直後は新しい環境で、新しい友人をつくることは、友人づくりが苦手な人にとって困難な状況であると考えられる。その困難さから、大学生のスタートアップ時に良好な友人関係を築く事が出来なければ、その後の大学生活にも悪影響がある。それらを支持する先行研

究を以下に示す。

国立大学保健管理施設協議会が発行している「学生の健康白書 1995」(1997)によると大学生の相談内容で主要なものは、精神的な問題を除いては、男子は学業のことであるが、女子は対人関係の悩みになっている。

鈴木・藤生・田上(1999)は、友人づくりが困難な人とはどういった性格の人かを、女子大学生を対象におこない、女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性を研究している。彼らの研究によれば、内向型の特徴は以下のものであると示されている。情緒の表出は控えめで、気分の変化は少ない。内気で気難しく、心配しがちである。交友範囲は狭く、友人をつくるのが困難である。他人からの批判や意見に敏感で、これによって感情を傷つけられやすい。つまり、内向的な性格の人はそうでない人に比べ、友人をつくるのが困難であり、そのうえ友人関係で悩むことも多いと考えられる。鈴木・藤生・田上(1999)は、友人をつくるという期待、つまり自己効力が友人の数と正の相関があると示し、内向的な性格の人は、自己効力が弱いため、友人の数が外向的な人よりも少ないということを明らかにした。

岩田(2014)は、大学生を対象に実施した質問紙調査のデータを用いて、生活の満足度の規定要因も明らかにした。質問用紙から得られたデータを回帰分析により、経済的に余裕があり、将来への不安が少ないほど、生活満足度は高くなる傾向があることを示した。それと同程度に、恋人や友人との関係など人間関係の良好さが、生活満足度の重要な規定要因になっている結果を得ている。

平成 21 年度「国民生活選好度調査」では、主観的幸福度を尋ねるとともに、なぜ自分が幸福(または幸福ではない)と判断したのかの基準も尋ねている。その結果、15 歳~29 歳の 6 割が友人関係と回答している。他の世代では高くても 4 割程度となっており、若者の主観的幸福度の基準として友人関係が重要なことがわかる。

以上のように、現在の大学生にとって、友人関係などの人間関係の良好さが、生活満足度の高さを規定する要因となっている

私たちの研究は、友人同士 2 人ペアで似ているかどうかのアンケートを別々にとり、研究者が似ているかを判断している。また、大学の少人数クラスでの友人が作りやすいクラスづくりを提案している。この 2 点において新規性があると言える。

# III 分析

## (1) アンケート設計と調査方法についての留意点

私たちは友人の類似性を明らかにするためにアンケート調査を行った。アンケート作成の際には、回答者の性別や年齢、学業成績といった個人の「属性」についての20の質問項目に加えて、自尊心の高さや内向性や外向性、恋愛観といった人の心理尺度を測る設問を『心理測定尺度集Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ』より抜粋し2人1組のアンケート回答者の属性および心理的傾向の類似性を明らかにするように設計している。心理尺度を測る設問の例として「Q27: いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである」「Q28: にぎやかなところが好きである」「Q29: 人から注目されるとうれしい」といったものがあるが、これらは内向的か外向的かを測る設問である。これらの設問に対して、「あてはまる=4」「ややあてはまる=3」「ややあてはまらない=2」「あてはまらない=1」という4つの選択肢の中から1つ選んで回答することになっている。これらの心理尺度を測る35個の設問を用意した。

また、アンケート実施の際の留意点であるが、アンケートに協力してもらうペアの人同士の親密度を考慮するため、「一週間でその友人と会う頻度」という設問を設けた。なお、この研究の特性により、アンケートへの回答中はペアの友人と話し合うことや、回答を見せあうことをせず、各自での回答をおこなうこととした。私たちのとったアンケート項目は以下のとおりである。

①あてはまるものに○をするか、記述が必要なところには記述をしてください。

1. 性別:	男・女
2. 年齢:	歳
3. 身長:	cm
4. 体重:	kg
5. 職業:	大学生・大学生以外
6. GPA:	
7. 専攻:	文系・理系
8 高校時代:	私立・公立
9 高校時代:	男子校・女子校・共学
10. 生活習慣:	朝型・夜型
11. 住まい:	実家・下宿
12. 家は大学より:	西・東
13. 性格:	インドア・アウトドア
14. 恋人:	いる・いない
15. 今一緒にアンケートに答えている友人とはどこで 出会いましたか?:	
16. その友人との友達歴:	年
17. その友人と会う頻度:	週日
18. 自分の自由な時間を10とするならそのうち友人(※)・恋人・バイト・その他に どれくらいの割合で費やしますか?(すべての数字を足して10になるようにしてください (※この質問での「友人」とは、今一緒に答えている友人だけでなく、あなたの友人全般のことを指します。))	
	友人: 恋人: バイト: その他:
19. 大学の講義室ではどの辺にすわっていますか?:	前・真ん中・後ろ
20. 外食するならいくらまで払えますか?:	1000~・2000~・3000~・5000~・10000~



②以下の質問に対して「あてはまる」ものには4「ややあてはまる」ものには3  
「ややあてはまらない」ものには2「あてはまらない」ものには1をつけてください。

---

- Q1) だいたいにおいて、自分に満足している
- Q2) 買い物は、前もって色々調べてからする方だ
- Q3) 真面目な話をよく茶化す
- Q4) 今どのようなファッションが流行っているかについてよく知っている
- Q5) 他のどんな要因にもかかわらず、ある人を愛したら、その人と結婚するには十分である
- Q6) 愛する人といえる時には、ワクワクしたりロマンチックな感情を抱くよりもむしろ、落ち着きやリラックスした気持ちが感じられることが重要である
- Q7) 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ
- Q8) 私は、友人が自分を支持してくれていることが分かっている時だけ、進んで議論に加わる
- Q9) 2、3人の人と非常に親密な友情を持てれば満足である
- Q10) 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう
- Q11) 他者の外見に気を取られやすい
- Q12) 相手の考えていることに気を使う
- Q13) お互いのプライバシーには入らない
- Q14) 1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする
- Q15) バスや電車では、立っている人に席を譲る
- Q16) 馬鹿にされると、すぐ頭に血がのぼる
- Q17) 友人集団の仲間がどう思おうと、私は自分のやり方で物事を行う
- Q18) 自分の予想外のことが起きると、すぐにその原因・理由を考える
- Q19) ささいなことにかっとしやすいほうだ
- Q20) 友人と趣味や好みが近いか（友人全体に）
- Q21) 友人という存在は色々な面で刺激を与えてくれると思う
- Q22) 恋愛は生きていくために必要なものである
- Q23) 恋愛をすると相手を独占したくなると思う
- Q24) ネット上には自分の居場所があると感じられると思う
- Q25) (議論などの場で) 自分の意見は主張する
- Q26) 一度、決心するとすぐ行動に移す
- Q27) いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである
- Q28) にぎやかなところが好きである
- Q29) 人から注目されるとうれしい
- Q30) 友達グループのメンバーからどう見られているか気になる
- Q31) 私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている
- Q32) 自分の問題は、最後は自分で解決しなくてはならないものだと思う
- Q33) 私は自分から進んで友達を作ることは少ない
- Q34) 私の場合、集まりがあった時ひとりぼっちの人を見ると、話しかけてあげたくなる
- Q35) 私は友達が多いほうだ
-

表 1

	最小/0	最大/1	平均	標準偏差
性別 男=0 女=1	0=93	1=51	0.354	0.480
年齢	18	48	20.625	3.254
身長	146	187	166.203	9.021
身長差			7.128	4.641
体重	32	84	55.860	9.318
BMI	9.77	32.45	20.163	2.525
BMIの差			2.519	2.594
職種 大学生=0 それ以外=1	0=139	1=5	0.035	0.184
GPA	0	3.83	2.410	0.699
GPAの差			0.653	0.618
専攻 文系=0 理系=1	0=134	1=7	0.050	0.218
高校時代 私立=0 公立=1	0=51	1=93	0.646	0.480
男子校 当てはまらない=0 当てはまる=1	0=129	1=15	0.111	0.315
女子校 当てはまらない=0 当てはまる=1	0=138	1=6	0.042	0.201
共学 当てはまらない=0 当てはまる=1	0=22	1=122	0.847	0.361
生活習慣 朝型=0 夜型=1	0=54	1=90	0.625	0.486
住まい 実家=0 下宿=1	0=121	1=23	0.160	0.368
家の方角(大学から) 西=0 東=1	0=79	1=62	0.440	0.498
性格 インドア=0 アウトドア=1	0=100	1=44	0.368	0.859
恋人 いる=0 いない=1	0=49	1=95	0.660	0.475
友達歴	0.5	15	2.938	2.535
友達歴の差			0.278	0.889
週に会う頻度	0.5	7	3.300	1.767
・時間の使う割合				
友達	0.5	10	3.115	1.505
恋人	0	7	1.483	1.830
アルバイト	0	6	2.087	1.533
その他	0	9	3.302	2.385
・教室で座る場所				
前	0=107	1=34	0.241	0.429
真ん中	0=72	1=69	0.496	0.502
後ろ	0=98	1=43	0.305	0.462
外食にかかる最大価格(夜)	1000	10000	2902.778	1759.368
外食にかかる最大価格(夜)の差			1416.667	1610.716

アンケートは甲南大学生を中心とした 144 人、お互いに友人だと思っている 72 ペアを対象におこなった。表 1 は、私たちがおこなったアンケートの記述統計である。性別に関しては男性の方が多いといえるが、分析に支障が出るほどの偏りはないと判断した。また、職業についてだが甲南大学内でのアンケート調査をおこなったため大学生が 95%以上を占める。友達歴については、私たちは大学 3 回生であり、アンケートを依頼する対象が同学年の大学 3 年生に集中したことで友達歴の平均が 2.938 になったと推測される。

## (2) 友人は本当に似ているのか

友人のいない大学生が大きな損失を被っていることは「現状分析」の節で説明したとおりである。ここで、「友人の少ない大学生≒友人づくりが苦手な人」とすると、友人づくりが苦手な学生は一体どのような点で自分と似ている人を、あるいは似ていない人を友人として選びがちなのだろうか。このことを明らかにするためには、まず友人同士が本当に似ているのかということについても調査を行わなければならない。以上のことから、初めに「友人同士は本当に似ているのか」について検証し、次に「友人づくりが苦手な人はどのような点で友人と似がちなのか」ということについて分析を行った。

まず1つ目の「友人同士は本当に似ているのか」という疑問に答えるために、私たちはアンケートから分析を行う。初めに、一口に似ていると言っても一体どのような点がどの程度、似ているのかを明らかにする必要がある。私たちが採用した「ある人と、その友人が全体的にどのくらい似ているのか」を測る方法は、お互いに友人だと思っている2人1組でアンケートに回答してもらい、設問における回答のズレの大きさから類似度を測定するといったものである。アンケート結果からの類似度の具体的な導出方法であるが、仮にある設問で2人が「4-4」と同じ回答をすると、その設問における回答の傾向は似ている(=差が0)ということになる。また2者が「1-4」と真逆の回答をした場合、この間における回答の傾向は似ていない(=差が3)ということになる。この各設問の回答の差の合計が私たちの算出した類似度の指標となる。(以下より、この類似度の指標のことを「類似度指標」とこの論文では呼ぶ)もし2者間が全く同じ回答をQ1からQ35でしていた場合、類似度指標は0ということになり、真逆の回答をQ1からQ35でおこなっていた場合、類似度指標は105ということになる。類似度指標の値が小さければ類似度は高く、指標の値が大きければ類似度は低い。

表 2

ペアごとの回答の差の合計									
ペア 1	29	ペア16	34	ペア31	35	ペア47	22	ペア62	28
ペア2	30	ペア17	20	ペア32	27	ペア48	35	ペア62	31
ペア3	26	ペア18	40	ペア33	16	ペア49	25	ペア63	34
ペア4	18	ペア19	22	ペア34	23	ペア50	33	ペア64	24
ペア5	20	ペア20	25	ペア35	27	ペア51	31	ペア65	25
ペア6	33	ペア21	34	ペア36	12	ペア52	25	ペア66	23
ペア7	28	ペア22	25	ペア37	35	ペア53	35	ペア67	37
ペア8	33	ペア23	26	ペア38	33	ペア54	21	ペア68	32
ペア9	30	ペア24	32	ペア39	36	ペア55	39	ペア69	32
ペア10	38	ペア25	26	ペア40	44	ペア56	33	ペア70	36
ペア11	31	ペア26	28	ペア41	28	ペア57	30	ペア71	26
ペア12	37	ペア27	31	ペア42	27	ペア58	23	ペア72	40
ペア13	29	ペア28	34	ペア43	26	ペア59	19		
ペア14	33	ペア29	36	ペア45	29	ペア60	40		
ペア15	31	ペア30	24	ペア46	33	ペア61	32		

この研究のアンケート結果より導出された類似度指標の標本平均は 29.51 であったが、この数値から直ちに「友人は似ている」という結論を導き出すことはできない。したがって、29.51 という標本平均は、似ているという点において有意なものなのか仮説検定を行う。ここで仮に類似度が高いわけでもなく低いわけでもない友人のペアがいるとすると、そのペアの類似度指標は大きくもなく、小さくもないということになる。類似度が高いわけでもなく低いわけでもない友人のペアは、平均的に「回答の差」も多くもなく、少なくもないということが言えるので、それぞれ独立に 35 個の設問に対し、1 から 4 までの選択肢を 1/4 ずつの確率で答えるものとみなすことができる。したがって類似度が高いわけでもなく、低いわけでもない友人 2 人組がおこなったアンケートの各設問の回答の差の期待値をとり、それを合計することで、類似度が高いわけでもなく、低いわけでもないペアが仮にいたときにつくりだす類似度指標の理論平均と理論標準偏差を計算することができる。つまり、全ての設問に対して互いに独立でランダムに答える友人同士を類似度が高いわけでもなく低いわけでもない友人同士とすると、彼らの類似度指標は理論平均 43.75、理論標準偏差 5.728 の確率分布にしたがう。

私たちがおこなったアンケートの結果では、どのペアの類似度指標も上で述べた理論平均 43.75 よりも低い。つまり、私たちのアンケートに回答したすべてのペアはどちらかというように似ている傾向がある。また各ペアを個別に見てみると、72 ペアのうち 2/3 にあたる 48 ペアで、類似度指標は上で述べた理論平均 43.75 から 2 標準偏差を引いたものよりも低く、5%水準で「似ている」といえる。また、72 ペアのうち、その 82%にあたる 59 ペアは 10%水準で有意に「似ている」。そして私たちが実施したアンケートにおいて、ペアの類似度指標の平均は 29.51 で、これは上で述べた、理論平均 43.75 から 2 標準偏差を引いたものよりも低く、5%水準で有意に低いということが分かる。

しかし、日本人は 1 や 4 といった極端な回答を避ける傾向にある。そこで先ほどの各設問に 1/4 の確率で回答する、似ているわけでもなく、似ていないわけでもない 2 人組の類似度指標とは別の基準を作成する。その作成方法であるが、私たちが用いたアンケートにおいて 144 人が回答した設問 35 個に対し、それぞれの設問ごとの回答割合を回答確率とする。そして 35 個の設問において独立に選択肢を選んだ 2 人の類似度指標を算出した。これは私たちの標本からランダムに選ばれた、友人であるか友人でないか分からない 2 人組の類似度指標とみなすことができる。この場合、類似度指標の理論平均は 32.17207 となり、また似ているわけでもなく、似ていないわけでもない 2 人を 72 ペア取り出したときの標本での理論標準偏差は 0.552974 となった。この方法においても、私たちがアンケートをとった友人ペアの類似度指標の標本平均 29.51 は、似ているわけでもなく似ていないわけでもない 72 ペアからなる理論平均 32.17207 から 2 標準偏差を低く、5%水準で似ている。

以上のことから「友人同士は本当に似ているのか」という疑問に対しては、「5%水準で有意に似ている」ということが明らかとなった。

### (3) 友人づくりが苦手な人について

次に私たちが明らかにしたいことは、友人づくりが苦手な人は、はたして友人と似ているのかについてである。なぜこのようなことを調べるのかと言うと、アンケート結果から友人関係にあるペア全体では似ていることが明らかになったが、現状分析の節にあるような、友人づくりが苦手な人において限定すると、はたしてそういった人たちは、友人と似

ているのかそれとも似ていないのか、または似ているわけでもなく似ていないわけでもないのでという疑問が残るからである。この節では友人づくりが苦手な人について注目し、回帰分析を行った。

分析を行うにあたり、まず私たちは先行研究より友人づくりが苦手な人の特徴として「1.内向的な性格である<sup>1</sup>」「2.孤独感を持っている<sup>2</sup>」「3.社交性が低い<sup>3</sup>」の3つに加え、もう1つ独自に「4.自分の友人が少ないということを自覚している」を挙げた。この4つを説明変数に入れ回帰分析を行った。外向性・内向性を測る設問として「いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである」「にぎやかなところが好きである」「人から注目されるとうれしい<sup>4</sup>」の3つを、孤独感を測る設問として「私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている」「自分の問題は、最後は自分で解決しなくてはならないものだと思う<sup>5</sup>」の2つを、社交性を測る設問として「私は自分から進んで友人を作ることは少ない<sup>6</sup>」という設問をアンケート項目に入れることにした。これらの設問はそれぞれ、私たちが作成したアンケート内の Q27, Q28, Q29(内向性)、Q31, Q32(孤独感)、Q33(社交性)に相当する。また、自身の友人の人数に対する意識として、Q35「私は友人が多いほうだ」という設問を設けた。この Q35 は私たちが独自に考案した設問であり、回答者の自身の友人の数に対する意識を測るものである。

私たちは回帰分析を行う上で、「類似度指標」を被説明変数とした。先ほど述べたように類似度指標が大きいかほど類似度が低く、類似度指標の値が小さければ類似度は高い。つまり、類似度指標を被説明変数にして回帰分析を行うことで、類似性に影響を与える要因を分析することができる。また被説明変数である類似度指標は Q1 から Q35 の各設問の回答のズレから算出しているため、算出に用いた変数を説明変数として使用することになる。そのため Q27, Q28, Q29, Q31, Q32, Q33, Q35 を同時に説明変数にせず、別個に説明変数として回帰分析を行うこととした。また、心理的傾向を測る 35 個の設問以外に友人の類似度に影響を与える可能性のある属性を被説明変数に入れ、コントロール変数にしている。回帰分析を行った結果、Q27, Q28, Q31, Q32 を個別に説明変数とした分析ではその変数は有意とならなかったが、Q29, Q33, Q35 を個別に説明変数としたモデルでは有意な結果が確認されたため以下の表にまとめている。Q29, Q33, Q35 を説明変数とした回帰式が以下の表でそれぞれモデル 1, 2, 3 と呼ばれている。

---

<sup>1</sup> 鈴木 由美、藤生 英行、田上 不二夫 (1999) 「女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性 (社会的内向性・思想的内向性) の影響について」『和洋女子大学紀要』第 39 集 (文系編)

<sup>2</sup> 石田晴彦 (1998) 「友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感」『社会心理学研究』第 14 巻 1, pp.43-52

<sup>3</sup> 石田 晴彦 (2003) 「友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響」『対人社会心理学研究』第 3 号  
ここで私たちはシャイネス＝社交性が低いと解釈し研究を進めた。

<sup>4</sup> 「いろいろな人と知り合いになるのが楽しみである」「にぎやかなところが好きである」「人から注目されるとうれしい」の3つの設問は 5 因子性格検査 (辻 1995) より外交性・内向性を測る設問として抜粋した。

<sup>5</sup> 「私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている」「自分の問題は、最後は自分で解決しなくてはならないものだと思う」という設問は、『心理測定尺度集 I』p217 の孤独感の類型判別尺度 (落合 1983) より使用している。

<sup>6</sup> 「私は自分から進んで友人を作ることは少ない」という設問は『心理測定尺度集 I』p235 早稲田シャイネス尺度 (鈴木・山口・根建 1997) 内の「自分から進んで友人を作ることが多い」(他者に対する不安を測る設問)を参考に作成しており、回答者の社交性を測る設問として用意した。

表 3

	モデル1	モデル2	モデル3				
	係数 t値	係数 t値	係数 t値				
const	10.409 0.4919	16.780 0.812	48.683*** 2.685	自分の自由な時間を10とする 内に友人に費やす割合	-0.192 -0.5496	-0.391 -1.139	-0.453 -0.917
性別：男=0・女=1	-4.217** -2.3448	-4.900*** -2.632	-5.472*** -3.021	自分の自由な時間を10とする 内に恋人に費やす割合		-0.235 -0.629	-0.345 -0.770
年齢	1.614*** 2.7471	1.608*** 2.804		自分の自由な時間を10とする 内にバイトに費やす割合		-0.216 -0.571	
身長	-0.020 -0.2125	-0.069 -0.750	-0.021 -0.228	自分の自由な時間を10とする 内に他のことに費やす割合			-0.107 -0.295
BMI	-0.193 -0.9016	-0.210 -1.007	-0.146 -0.691	その友人と会う頻度	-0.144 -0.4336	-0.122 -0.374	-0.511* -1.746
GPA	-1.265 -1.6573	-1.309 -1.654		大学の講義室で前に座って いる○=1・×=0		1.990 1.366	
専攻：文系=0・理系=1	0.063 0.0254	0.310 0.126		大学の講義室で真ん中に 座っている○=1・×=0		1.343 1.195	
男子校：○=1・×=0	-3.450* -1.8616	-4.669** -2.350	-7.039** -2.278	外食するならいくらまで払え ますか？	0.000 -0.0653	0.000 -0.242	
女子校：○=1・×=0		2.265 0.785		Q7.今の社会では、強いものが 出世し、勝ち抜くものだ		1.908*** 3.126	
高校時代：私立=0・公立=1		-1.530 -1.179	-1.471 -1.173	Q14.1人の友達と親しくするよりは グループで仲良くする			-0.549 -0.833
共学：○=1・×=0			-3.707 -1.320	Q28.にぎやかなところが好きで			-0.848 -1.385
生活習慣：朝型=0・夜型=1	-0.708 -0.6134	-0.635 -0.542		Q33.私は自分から進んで友達 を作ることは少ない	-0.678 -1.1583		
住まい：実家=0・下宿=1		-1.349 -0.923		Q29.人から注目されるとうれ しい	1.071* 1.7537	0.900 1.477	
家は大学より：西=0・東=1	-0.765 -0.7108	-0.766 -0.721		Q33.私は自分から進んで友達 を作ることは少ない		-1.002* -1.744	
性格：インドア=0・アウトド ア=1	0.035 0.0552	0.154 0.247		Q35.私は友達が多いほうだ			1.091 1.622
恋人：いる=0・いない=1	-0.027 -0.0235	-0.850 -0.633	-1.337 -1.015	自由度調整済み決定係数	0.133	0.205	0.100
ペアとの友人歴	-0.257 -0.9567	-0.218 -0.817		p値 (F)	0.006	0.012	0.014

表 3 からモデル 1,2,3 に共通して性別の係数は 5%水準で有意に負であり、女性であれば友人との類似度が高いということが確認される。この結果は門田・平本(2004)の結果と一貫性を持つ。ここで理由は特定できないが、興味深いことに男性は女性よりも類似度は低いが、男子校出身者の係数は 5%水準で有意に負であり、友人との類似性が増すことが分かった。また Q29「人から注目されるとうれしい」は 10%水準で有意に正であり、Q33「私は自分から進んで友人を作ることは少ない」は 10%水準で有意に負である。このことから内向的な人であれば、また社交性が低いほど友人と類似する傾向があるといえる。

モデル 3 を見てみると、Q35「私は友人が多いほうだ」という設問がほぼ 10%に近い水準で有意であり、「類似度指標」に対する説明力を持っているといえる。この Q35 の有意性により、自身の友人の数が少ないということを自覚している人は、友人との類似度が高いと判断できる。つまり私たちは友人づくりが苦手な人の特徴として「1.内向的な性格である」「2.孤独感を持っている」「3.社交性が低い」「4.自分の友人が少ないということを自覚している」という 4 つを挙げたが回帰分析の結果、「1.内向的な性格である」「3.社交性が低い」「4.自分の友人が少ないということを自覚している」という人はそうでない人と比べて、友人と

の類似度が高いということが分かった。また、「2.孤独感を持っている」という点では類似度に影響を与えないということが見られた。

#### (4) 友人づくりが苦手な人はどのような点で友人と類似するのか

友人づくりが苦手な人が持つ要素として「1.内向的な性格である」「2.孤独感を持っている」「3.社交性が低い」「4.自分の友人が少ないということを自覚している」の4つを挙げたが、1,3,4においてペアの類似性指標の大きさに負の影響を与えるということが有意に示された。つまり内向的である、社交性が低い、友人が少ないことを自覚している、という要素を持つ人はそうではない人よりも何らかの部分でより友人と類似しているということである。現状分析でも述べたように大学生活における友人関係の構築は非常に重要なものとなっている。このことから、友人づくりが不得意な人は非常に不利な立場に立たされていると言わざるを得ない。そのような人たちが、一体どのような点で自分と類似した要素を持つ人を友人として選択しているのかが判明した場合、その結果を利用したクラスづくりを提案し、友人づくりをしやすくするような環境を整えることができる。

では友人づくりが苦手な人は、それ以外の人と比べて、どういった部分で友人と類似しているのかを、この項で明らかにしていきたい。分析方法としては、まず友人づくりが苦手な人とその友人の相関を導出する。そして72ペア全体の相関と比べることで全体にはない相関が、友人づくりが苦手な人とその友人との間で観測された場合、その部分で類似しているということが分かる。

分析方法の詳細は、全ペアのうち少なくともどちらか一方に、友人づくりが比較的苦手な人(Q29で1,2、Q33で3,4、Q35で1と答えた人<sup>1</sup>)がいるペアだけを抽出し、そのペアについてアンケート項目ごとに相関係数を算出した。その結果を以下の表にまとめている。

---

<sup>1</sup> Q35だが、1、2と回答した人がいるペアを抽出すると72ペア中64ペアとなり、全体のペア数で算出する相関係数と変化がないと判断した。そのため1と回答した人がいるペアにのみ絞って抽出した。

表 4

	全部の 相関係数 (t値)	Q29でどちら かが内向的で あるペアの 相関係数 (t値)	Q33でどちら かが社交的で はないペアの 相関係数 (t値)	Q35でどちら かが友人が多 くないと意識 しているペアの 相関係数 (t値)	Q 20. 友人と趣味や好みが近いか (友人 全体に)				
Q1.						0.082	0.217	0.027	0.370*
だいたいにおいて、 自分に満足している	0.219*	0.2	0.373***	0.476**	友人という存在は色々な面で刺激 を与えてくれると思う	0.687	1.554	0.189	1.990
Q4						0.375***	0.345**	0.405***	0.395**
今どのようなファッションが流 行っているかについてよく知って いる	0.1522	0.055	0.325**	0.116	Q 22.	3.382	2.572	3.103	2.152
Q5.	1.289	0.381	2.405	0.584909	恋愛は生きていくために必要なも のである	0.291*	0.300**	0.214	0.408**
他のどんな要因にもかわらず、 ある人を本当に愛したら、その人 と結婚するには十分である	0.315***	0.276**	0.152	0.450**	Q 24.	2.545	2.192	1.533	2.232
Q7.	2.774	2.013	1.077	2.521	ネット上には自分の居場所がある と感じられると思う	0.244**	0.359***	0.248*	0.171
今の社会では、強いものが出世 し、勝ち抜くものだ	0.374***	0.348**	0.286**	0.326*	Q29	2.102	2.691	1.789	0.869
Q 12	3.377	2.601	2.089	1.725	人から注目されるとうれしい	-0.149	0.556***	-0.187	-0.149
相手の考えていることに気を使う	-0.047	0.225*	0.019	-0.045	Q 33.	-1.261	4.68	-1.329	-0.751
Q 14.	-0.395	1.617	0.133	-0.224	私は自分から進んで友達を作るこ とは少ない	0.087	0.020	-0.373***	0.005
1人の友達と特別親しくするよりは グループで仲良くする	0.231*	0.151	0.351**	0.299	Q 34.	0.734	0.142	-2.81	0.026
Q 15.	1.983	1.071	2.628	1.566	私の場合、集まりがあった時ひと りぼっちの人を見ると、話しかけ てあげたくなる	0.123	0.104	0.175	0.005
バスや電車で、立っている人に席 を譲る	0.267**	0.223*	0.291**	0.485**	Q 35.	1.033	0.735	1.241	0.026
	2.319	1.6	2.128	2.772	私は友達が多いほうだ	0.114	0.104	0.175	0.472**
						0.956	0.735	1.241	2.674

この表 4 を見て分かるように Q29 でどちらかが内向的な人がいるペアでは、その Q29 の質問に正の相関がみられ、内向的な人同士で友人になりやすいということが分かる。加えて Q12 に正の相関がみられ、この Q12 「相手の考えていることに気を使う<sup>1</sup>」は、友人に対しての「気遣い」を測る設問である。以上のことから内向的な人は自分と同じように内向的な人で「友人に対する気遣い」の度合いが同程度の人と友人になりがちであると分かる。

Q33 で少なくとも一方が社交性の低い人がいるペアにおいて、Q33 の相関を見ると、Q29 で確認された結果と異なり、同じ質問で負の相関を示している。つまり社交性の低い人は友人との類似度は高いが、社交性という面では類似していない。ではどの部分で類似しているかという Q4 「今どのようなファッションが流行っているかについてよく知っている<sup>2</sup>」の設問について正の相関があり、「衣服の流行への関心」の度合いで類似していると分かる。社交性の低さという点において友人づくりが苦手な人は、自分とは異なり社交性が高い人と友人になっている傾向にあるのは非常に興味深い。

1 「相手の考えていることに気を使う」という設問は『心理測定尺度集 I』 p166 の友人関係尺度 (岡田 1995) 内の気遣いの項目より使用している。

2 「今どのようなファッションが流行っているかについてよく知っている」という設問は、『心理測定尺度集 II』 p291 の服行動尺度 (永野 1994) 内の衣服の流行性に対する関する項目より使用している。



Q35 において自身の友人の数が少ないと感じている人が、1 人でもいるペアにおいて相関を出すと Q35 では正の相関がみられた。このことから、友人が少ないと感じている人の友人もまた、自身の友人の数は少ないと感じている。それから Q20「友人と趣味や好みが近いか<sup>1</sup>」において正の相関が確認された。また、Q1「だいたいにおいて自分に満足している<sup>2</sup>」、Q15「バスや電車で、立っている人に席を譲る<sup>3</sup>」の設問で、正の相関の値が全体の相関と比べて大きく異なり、有意であるため相関が強いといえる。このことから自身の友人の数が少ないと感じている人は、自分と同様に友人の数が少なく、「自尊心の高さ」、「親切心の大きさ」が同程度の人を友人として選択している。

---

<sup>1</sup> 「友人と趣味や好みが近いか」という設問は『心理測定尺度集Ⅴ』p192 友人関係尺度（吉岡 2001）内より使用している。

<sup>2</sup> 「だいたいにおいて自分に満足している」は、『心理測定尺度集Ⅰ』p29 の自尊感情尺度（山本・松井・山城 1982）より自尊心を測る設問として使用している。

<sup>3</sup> 「バスや電車で、立っている人に席を譲る」は『心理測定尺度集Ⅱ』p178 の向社会的行動尺（大学生版）より「小さな親切心」の度合いを測る設問として使用している。

## IV 政策提言

現状分析でも述べたように大学新入生の友人関係は、その人のその後の大学生活の質に影響を及ぼす。友人づくりが苦手な人は、そうでない人に比べて大学生活の質が劣ってしまうというデータもある。しかし、大学1年次における、比較的友人をつくりやすい少人数の授業のクラス分けは、客観的属性のみを反映しており、心理的傾向は全く反映されていないのが現状である。つまり、大学はクラス分けを入試区分や男女比、名前の50音順などで決めており、1人ひとりの心理的傾向を見て決めていない。大学のクラス分けは、小学校・中学校・高校とは違いあまり重視されていないが、この点に注目すべきであると考えます。

私たちはこの研究で、友人づくりが苦手な人にも友人がつくりやすくなるような環境を整え、よりよい大学生活を過ごして欲しいと考える。そこで、私たちは「アンケート結果を用いたクラスづくり」を提案する。

この研究でのアンケートを用いることで、本人すらも自覚しない友人選択における選好を明らかにすることが可能である。友人づくりが苦手な人の選好にしたがい、その人と友人になりやすい人をクラスに配分する。実際にその2人が友人になるかはわからないが、友人になりやすい人が1人でもいる場合といない場合を比べると、友人づくりが苦手な人の経済厚生は上昇する。

具体的なクラス分けの方法であるが、まず大学新入生1人1人に対し今回の研究で用いたアンケートの心理的傾向を読み取る設問1-35に答えてもらい、その結果から友人づくりが苦手な人をピックアップする。IVの分析結果から友人づくりが苦手な人で特に内向的な人は、友人に対する「気遣い」が同程度で内向的な人と、特に社交性の低さが原因で友人づくりが苦手な人は「衣服の流行への関心」が同程度で社交的な人と、そして友人の数が少ないと感じている人は「自尊心」や「親切心の大きさ」が同じくらいの人と友人になる傾向があることが分かっている。そこで、友人づくりが苦手な人は、彼らと友人になる傾向が高い人と同じクラスになるようにクラス編成を行う。

どの大学でも、友人関係に悩んでいる人が相談することができる施設として、カウンセリングセンターやそれに類するものがある。そのような施設を利用できることはもちろん重要であるが、友人関係に悩み相談しないといけない状況を未然に防ぐことがより重要である。私たちが提案する「アンケート結果を用いたクラスづくり」では、友人づくりを通して心の負担を軽くし、カウンセリングセンターを利用する状況を未然に防ぐという、カウンセリングセンターが果たせないような役割を果たすことができる。

私たちの研究のアンケートは、試験的なものであり、厳密に分析されたわけではない。そのため、実際にこの政策を行う際は、さらに多くの人に今回用いたアンケートを実施し、厳密な分析結果をもとにする必要があるだろう。しかしながら、アンケート結果は厳密にする必要性はあるが、アンケートを用いて大学新入生の心理的傾向を読みとり、その結果をもとにした大学新入生のクラス分けのアイデアはゆるぎなく使える。

## V 先行研究・参考文献

### 主要参考文献

- ・石田 晴彦(2003)「友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響」『対人社会心理学研究』第3号
- ・石田 安彦(1998)「友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感」『社会心理学研究』第14巻, 1, pp.43-52
- ・岩田 考(2014)「大学生の満足度の規定要因—全国26大学調査から—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第40巻, 2, pp.67-85
- ・梅本 信章(1992)「大学新入生の適応について—自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連」『盛岡大学紀要』11, pp.27-38
- ・門田 幸太郎、平本 毅(2004)「対人認知における類似性と非類似性について」pp.21-34.
- ・嶋 信宏(1991)「大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する—研究」『教育心理学研究』第39巻, 4, pp.76-83.
- ・下斗米 淳(1991)「対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化」『学習院大学文学部研究年報』37, pp.269-287.
- ・梅本 信章(1996)「大学入学直後の友人関係と不安に関する—研究」『盛岡大学紀要』15, pp.183-189
- ・三浦 理恵、青木 邦男(2009)「大学生の精神的健康に関連する要因の文献的研究」『山口県立大学学術情報』2, pp.175-180

### 引用文献

- ・鈴木 由美、藤生 英行、田上 不二夫(1999)「女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性(社会的内向性・思考的内向性)の影響について」『和洋女子大学紀要』第39集
- ・実施アンケート
- Q1は『心理測定尺度集I』p31の自尊心尺度(山本・松井・山城1982)内より使用している。
- Q2は『心理測定尺度集I』p197の認知的熟慮性—衝動性尺度(滝間・坂本1991)内より使用している。
- Q3は『心理測定尺度集I』p267のユーモア態度尺度(上野1993, 宮戸・上野1996)内より使用している。
- Q4は『心理測定尺度集I』p293の被服行動尺度(永野1994)内の流行性尺度から使用している。
- Q5は『心理測定尺度集II』p23の恋愛に対する態度尺度(和田1994)内の結婚への恋愛の項目より使用している。
- Q6は『心理測定尺度集II』p24の恋愛に対する態度尺度(和田1994)内の理想の恋愛の項目より使用している。
- Q7は『心理測定尺度集II』p65の達成動機測定尺度(堀野1987)内より使用している。
- Q8は『心理測定尺度集II』p75の日本版MLAM承認欲求尺度(植田・吉森1990)内より使

用している。

Q9 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p94 の親和動機尺度(岡島 1998)内より使用している。

Q10 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p133 の他者意識尺度(辻 1993)内の内的他社意識尺度の項目より使用している。

Q11 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p133 の他者意識尺度(辻 1993)内の外的他社意識尺度の項目より使用している。

Q12 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p167 の友人関係尺度(岡田 1995)内の気遣いの項目より使用している。

Q13 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p167 の友人関係尺度(岡田 1995)内のふれあい回避の項目より使用している。

Q14 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p167 の友人関係尺度(岡田 1995)内の群れの項目より使用している。

Q15 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p179 の向社会的行動尺度(大学生版)(菊池 1988)内より使用している。

Q16 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p205 の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤・曾我・山崎・島井・宇津木・大芦・坂井 1999)内より使用している。

Q17 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p243 の集団主義尺度(改正版)(ヤマグチ・クールマン・スギモリ 1995)内より使用している。

Q18 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p371 の価値志向性尺度(坂井・山口・久野 1998)内の理論の項目より使用している。

Q19 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p241 怒り喚起・持続尺度(渡辺・小玉 2001)内より使用している。

Q20 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p192 友人関係尺度(吉岡 2001)内より使用している。

Q21 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p192 友人関係尺度(吉岡 2001)内より使用している。

Q22 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p213 恋愛イメージ尺度(金政 2002)内より使用している。

Q23 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p213 恋愛イメージ尺度(金政 2002)内より使用している。

Q24 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p297 インターネット行動尺度(藤・吉田 2009)内より使用している。

Q25 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p357 共同性・行動尺度(土肥・廣川 2004)内より使用している。

Q26 は『心理測定尺度集Ⅴ』 p357 共同性・行動尺度(土肥・廣川 2004)より使用している。

Q31 は『心理測定尺度集Ⅰ』 p217 孤独感の類型判別尺度(落合 1983)内より使用している。

Q32 は『心理測定尺度集Ⅰ』 p217 孤独感の類型判別尺度(落合 1983)内より使用している。

Q33 は『心理測定尺度集Ⅰ』 p235 早稲田シャイネス尺度(鈴木・山口・根建 1997)内より使用している。

Q34 は『心理測定尺度集Ⅱ』 p226 間人度尺度(柿本 1995)より使用している。